

# 長野県革新懇ニュース

2025年2月号  
発行日 2月10日  
会費 2,000円  
購読料 3,000円(送料込)  
振替 00510-3-15971

303

発行 日本と信州の明日をひらく県民懇話会  
(長野県革新懇) 発行人: 山口光昭 編集長: 高村裕  
〒380-8790 長野市県町593 高校教育会館内  
TEL: 026-234-1231 FAX: 026-234-2219 メール: mail@nagano-kakushinkon.com

====今号の主な記事====

- 1面 坂本龍太郎さんインタビュー
- 2面 1面続き、「松枯れ対策をめぐる諸問題」村山隆さん
- 3面 日本政府を動かす核廃絶の実現を、小諸に「憲法九条の碑」読者の声、漢字パズル
- 4面 「雨よ降れ」「謝罪」の仕方 窪島誠一郎さん  
「写真で辿る信州と戦争」北原高子さん  
映画評論『私は憎まない』内山到さん

長野県革新懇

検索



## ウクライナの将来に向け

## 礎となる教育をめざす

坂本 龍太郎さん

(ワルシャワ日本語学校教頭)

### 外交を学ぶために 欧州の大学院に進学

Q ワルシャワでウクライナ支援の活動をされていますが、その経緯をお聞かせください。

日本にいた頃はポーランドに住むとは全く考えていませんでした。高校までは長野で育ち、その後静岡大学に行き、さらに英語を勉強するためにアメリカに留学しました。そのままアメリカの大学院に行くつもりでいたんですが、日本の大学に復学したタイミンで、静岡大学がベラルーシの大学と提携を結んだことを知りました。そして、2度目の留学としてベラルーシに行くことにしたんです。松本に「チェルノブイリ医療基金」という団体があるんですが、私が高校1年生の時にベラ

ルシから「少年少女舞踊団」を千曲市や坂城町、松本市に招聘したんです。私も交流に加わったことで、ベラルーシという国があることを知りました。ベラルーシは独裁政権で、ヨーロッパの北朝鮮のような国なんです。そこで1年間、国際経済学を学びました。ポーランドはベラルーシの隣国なので、留学中何度も訪問しました。

先ほどお話ししたようにアメリカの大学院に行くという計画はあったんですが、ポーランドでアメリカよりもずっと安く学べる大学院を見つけ、私の専門である外交を学べるならば、ヨーロッパの方が良いと考え、この大学院に2010年に入学しました。そして、大学院の2年目に「ワルシャワ日本語学校」を設立し、卒業したあともそのままポーランドに残りました。その関係でポーランドに住んでおり、今回の支援活動に関わる地盤があったんです。

戦を経て1918年に123年ぶりに独立し、ポーランドが国としてヨーロッパに戻ってきました。しかし、ナチスドイツがポーランドを侵略し、第二次世界大戦が始まると、またポーランドはなくなりました。戦後、国は戻ってきたんですが社会主義陣営に組み込まれました。その後、共産主義体制が崩壊し今日に至ったわけですが、ヨーロッパの平和は長く続かず、2014年にロシアによるクリミア半島の一方的占領やドンバス地方への介入があり、今回の全面戦争につながりました。

3年前、ロシアによる本格的な侵攻が始まった際、率直な受け止め方として、戦争の時代がまたしても戻ったと感じました。歴史を学ぶ中で、戦争が起ると、女性や子ども、高齢者などの弱者が大きな被害を受けます。そうした歴史を繰り返すことが許せないという、怒りと絶望を感じました。

### 欧州の歴史は 戦争の繰り返し

Q ロシアによるウクライナへの侵攻についての受け止めをお聞かせください。

ポーランドやヨーロッパの歴史はまさに戦争の歴史です。ポーランドは歴史上、国境が頻りに移動しました。1772年の第1次分割、1795年の第3次分割などロシア、オーストリア、そしてプロイセンに侵略され、ポーランドはヨーロッパの地図からなくなった歴史もあります。その後、第一次世界大

### 先が見えない 戦時支援の困難さ

Q 支援の状況や課題についてはどうでしょうか？

自然災害が多い日本で支援というと、主に最初から復興支援です。つまり支援の手を入れれば入れるほど、状況が改善されていくということが前提としてあります。しかし、私たちが行なっているのは戦時支援であり、手を入れても次々に破壊され、被害が拡大し、犠牲者もどんどん増えていくんです。復興支援とは全く違い、まだそこにも達して

いないんです。そうした中でどのような支援を行なったかということですが、まずは避難所運営です。2月24日、マイナス10度の真冬でした。戦争から逃げて来ても、避難する場所がなければ凍死してしまいます。ですから、当初の緊急的な支援は避難所運営でした。具体的には、公民館や体育館などを避難所にして、多くの人たちを迎え入れました。22年というコロナウイルスが猛威を振るっていた時期で、人々との間は2層保ちましようなどの感染対策が必要だったので、収容できないので、開戦と同時にパンデミックも社会的に終わりました。

次に避難民の受け入れ体制を作るんです。ポーランドに避難してきた人々がずっと避難民として過ごすわけにはいきません。子どもたちは学校に行つて学ばなければ、大人も生活のために仕事が必要なんです。そのためには学校の登録や仕事の紹介、あるいはポーランド語を教える必要があります。言語支援も行いました。私も自宅に避難民家族を2家族はいま日本で暮らしています。